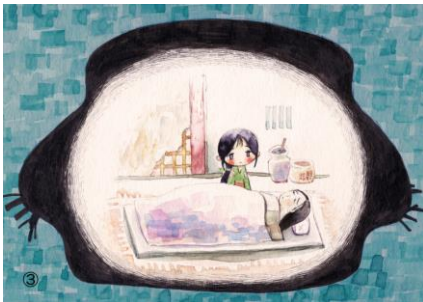




〔一枚目〕
草津市の民話「青花」



〔二枚目〕
むかし、近江の国の石原という代官の下に、木の川村という小さな村がありました。



〔三枚目〕
その村に、病気の母と、きよという娘がその日暮らしをしていました。
きよは貧しい暮らしにもかかわらず、ほんとうに心やさしい娘でした。



〔四枚目〕
ある日のこと、きよは夢の中で観音様のお告げを聞きました。
「大そう貧しいようだが、明日の朝早く起きて、草津川の土手の上の一本松の所へ行きなさい。その日食べるだけのお米を授けましょう」。



〔五枚目〕
きよはつぎの朝、起きるとすぐに草津川の一本松の下へ行ってみました。
松の木の下に箱が置いてあり、白いお米が入っていました。
きよは、その中から、その日食べる分だけをすこしばかり頂いて帰りました。



〔六枚目〕

きよは、つぎの朝もまた草津川へ出かけてみました。

すると同じように、白いお米がありました。きよは、その日も、すこしもらって帰りました。こうして、五、六日の間は、毎朝通い、その日その日のお米を頂いて帰ることができました。

貧乏なきよのくらしも、これで大変楽になったのですが、そのうちに、きよの心の中に欲のきざしが現われてきました。

毎日、その日の分だけでなく、一度にぜんぶ頂いて帰ることにしたのです。



〔七枚目〕

きよが、つぎの朝、行ってみると、白いお米ではなく、なにやら食べられそうもない黒い粒が入っているのです。

「ああ、私が欲の心を出したばかりに、母様に、おいしいご飯もさしあげることができなくなってしまった。どうぞおゆるし下さい」



〔八枚目〕

きよはそれから毎日、観音様にゆるしをこうのでした。



〔九枚目〕

苦しい日が続いたある夜、きよは、また夢の中で、観音様のお告げを聞きました。

「お前が欲の心を出したので、白いお米を黒い粒に取り替えたのだ。

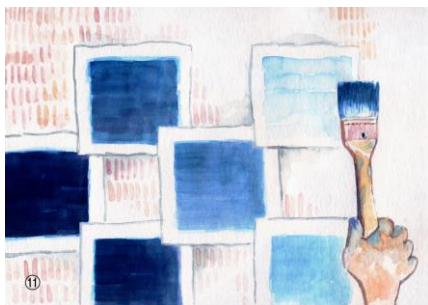
黒い粒は青花の種で、それをまくと青い花が咲きます。

それをつみとって紙にしみこませなさい。京の友禅問屋で買いとってください。それで食べて行かれるだろう」。



〔十枚目〕

きよは、急いで黒い種をとりにいき、さっそく畑にまいてみました。
するとお告げのとおり、夏、青い花がたくさん咲きました。



〔十一枚目〕

朝早く、それをつんでその汁をしぼり、紙にしみこませます。乾かしてはしみこませ、乾かしてはしみこませる炎天下の、それはそれは苦しいことでした。その上、この青花紙は雨や汗にふれると色が流れて、その紙をだめにしてしまいます。暑い中での気苦労は大変なものでした。



〔十二枚目〕

こうして、できたものを、京の友禅問屋に持って行きますと、下絵を書くのによいので、思わぬ高い値段で買いとってくれました。



〔十三枚目〕

きよは、毎日、早朝の花べんつみから、からすのぬれ羽色に和紙がしあがるまで、身を粉にして働かねばなりませんでした。地獄花ではなかろうかと思ったことも度々でした。しかし、そのかわりこれで無事に暮らして行かれるようになりました。

母様の病も直り、そのうち近所の人びとも、これを見習い、きよから種を分けてもらって、この花をつくるようになりました。こうして、この青花からとった青花紙は、近江の国の特産物になりました。



万葉歌巻7・12うち書巻
月草(つきくさ)に衣を染むる 君がため 阿(まだら)の衣 阿(す)らおと思ひて
訳：ツキクサで衣を染めます。あなたのため、まだら(縞縷)の衣を阿(す)らうと思ひて。

〔十四枚目〕

青花は、今でも高級な友禅染に使われています。

青花はいまの露草のことで、ずっと昔はツキクサといい、水で色がさらりと流れ落ちる特性をうまくとり入れて、万葉集の中にも歌われています。

原作：「木ノ川老人クラブ」